

発行日：平成24年1月30日
発行責任者：河井 繁
編集・発行：伊勢赤十字病院 広報委員会
伊勢市船江1丁目471番2
☎0596-28-2171(代表)
<http://www.ise.jrc.or.jp>

理 念

人道に基づき赤十字病院として
質の高い医療を提供します

基本方針

1. 人道を掲げる赤十字の原則に基づき、人々の健康と生命の尊厳を守ります
2. 人権を尊重します
3. 個人情報保護に万全を尽くします
4. 医療水準の向上に努め、最善の医療を提供します
5. 地域医療機関との連携により、個人に合った適切な医療を提供します
6. 救急医療の充実に努めます
7. 災害時の医療救護や国際救援に貢献します
8. 健全な運営に努め、末永く地域社会に貢献します

東日本大震災での救護活動報告

3月11日に発生しました東日本大震災は死者・行方不明者2万人という戦後最悪の被害をもたらしました。震災で亡くなった方々に改めて哀悼の意を表すとともに、被災されたみなさまに心からお見舞い申し上げます。



第6班 巡回診療に向かう救護班

日本赤十字社の取り組みの概要

日本赤十字社は、日本国内や海外の多数の皆様にご支援をいただきながら、この未曾有の災害に総力を挙げて対応しております。日本赤十字社は、「苦しんでいる人を救いたい」という思いを結集し、赤十字の使命である「人間のいのちと健康、尊厳を守る」活動に取り組んでまいりました。皆様から日本赤十字社へ託された義援金は自治体を通じて被災者の方々へお届けするとともに、被災者の生活再建を応援するための復興支援事業にも取り組んでいます。また、地震発生直

後より医療救護班を出動させ「医療救護活動」を行い、現在も慢性疾患を抱えた高齢被災者への対応、精神的なダメージに苦しむ被災者に寄り添う「こころのケア」、避難生活を健康に過ごすための生活指導に取り組む「看護ケア班」など、きめ細かな体制で被災者をサポートしています。また、全国の赤十字奉仕団が被災地にて炊き出しや給水作業の手伝い、無線による情報収集、被災家屋の片づけなどボランティア活動を行ったり、地元で街頭募金などに協力しています。



当院の取り組み

3月11日14:46東日本大震災発生、15:00山田赤十字病院内に災害対策本部を設置しました。

当院におきましても、地震発生から継続的に医師・看護師等を被災地に派遣し、医療支援の一端を担ってまいりました。当院は救護班を1班から11班まで栃木県大田原市、宮城県石巻市へ派遣しています。また、石巻赤十字病院への支援要員として医師・看護師・薬剤師・事務職員16名を派遣しました。こころのケア要員として5名を派遣、さらに介護チーム職員として2名を派遣しています。

東日本大震災における当院の救護活動について報告いたします。

I. 救護班派遣

	派遣先	派遣期間	活動概要
第1班	栃木県大田原市	3月12日～3月14日	3月12日10時大田原赤十字病院（栃木県）へ出発。23時30分に大田原赤十字病院へ到着。現地の災害対策本部で情報収集、ミーティングを行い、翌日3月13日に2名の患者の転院搬送、その後大田原市にて現地の保健師からの情報提供を受け、避難所巡回診療を行いました。避難されている人の中には帰宅困難者もあり、常用薬の処方等も行いました。
第2班	宮城県石巻市	3月14日～3月17日	発災から4日目、現地では石巻赤十字病院の近隣の病院は機能しておらず、石巻赤十字病院は押し寄せる患者の対応に追われていました。到着後、石巻赤十字病院では産科診療の補助とトリアージ区域での活動を行っています。夜間19時頃より翌朝9時過ぎまで黄色エリア（中等度）で患者が途切れることのない状況での活動となりました。
第3班	宮城県石巻市	3月20日～3月23日	昼間は1200名ほどが避難している渡波小学校の教室に救護所を開設しました。教室の窓ガラスは割れ、床は泥で汚れており、ライフラインはすべて切断されている中で診療を行いました。石巻赤十字病院への透析患者の搬送、外傷、高血圧、感冒、定期薬を流された患者さんへの対応を行いました。また、深夜には、石巻赤十字病院にて救急患者の診療を行っています。
第4班	宮城県石巻市	3月28日～3月31日	救護所となっている湊小学校の2階家庭科室にて9時～14時ごろまでの5時間で、約60名の患者の診療に携わりました。診療内容は、薬の処方や血糖検査、インフルエンザ検査等でした。その後17:00～24:00には石巻赤十字病院にて黄色エリア（中等度）、緑エリア（軽傷）を担当し、90名近くの患者さんの診療にあたりました。
第5班	宮城県石巻市	4月 4日～4月 7日	渡波小学校では、薬剤師が業務支援に入りました。また、16:30～24:00までは黄色及び緑エリアの診療にあたり、軽傷者54名、中等症者1名の診療を行いました。翌日、9:40ころから15:00まで中里小学校の救護所・巡回診療にて20名診療にあたりましたが、医療ニーズは徐々に落ち着いてきているようでした。
第6班	宮城県石巻市	4月 8日～4月12日	石巻赤十字病院から車で約2時間、石巻市雄勝町大須地区、521名の避難者がいる大須小学校にて他の医療チームと情報交換を行いながら、地区内の巡回診療や物資確認等を行いました。巡回診療では、小児麻痺による寝たきりの患者や高血圧患者など2日間で延べ146戸を訪問しました。また、大須小学校に宿泊し、24時間診療ができる体制を整えました。震災で家族を亡くした方やうつ症状のある方に対して、臨床心理士が精神的なフォローを行いました。
第7班	宮城県石巻市	4月13日～4月17日	荻浜小学校より2名の患者を石巻赤十字病院へ、石巻赤十字病院より患者2名の市内病院への搬送に従事しました。翌日と翌々日には渡波小学校での巡回診療を行っています。
第8班	宮城県石巻市	4月18日～4月22日	渡波小学校において、外来診療と校内巡回診療の2つに分かれて活動を行いました。震災から1か月で診療内容も気管支や眼の炎症などで医療面は充足されてきているようでしたが、保健衛生面への対応が急務であると感じました。
第9班	宮城県石巻市	4月28日～5月 2日	石巻市第7エリア湊小学校にて他の医療チームと連携し、巡回診療及び救護所診療を行いました。また、エリア幹事の役割も担い、各医療チーム・ボランティアなどの調整、救護所と本部との調整等を行いました。
第10班	宮城県石巻市	5月21日～5月26日	1日目は石巻市内雄勝地区雄心苑での救護所診療、救護所の環境整備に従事しました。翌日は47名が避難している旧水濱保育所において巡回診療を行い13名の診察にあたり、午後は再び雄心苑での診察と並行し、診察室内の整備を行いました。3日目は雄心苑での2名の患者の診察後、大須小学校へ巡回診療に向かいましたが、途中保健師からの情報で、転倒転落患者の診察、救急車の要請を行いました。大須小学校での診察は18名でした。
第11班	宮城県石巻市	7月 1日～7月 7日	石巻市雄勝地区雄心苑での診療及び巡回診療を行っています。

救護活動を体験して ― 医師の立場から ―

外科 副部長 藤井幸治

2011年3月11日、午後2時46分、東日本大震災発災…。私はちょうど手術が終了したところでその一報を知り、すぐに当院の災害対策本部に向かい当院の対応指示を待ちました。翌日から継続的に救護チームが派遣されることとなり、私は3月末に石巻赤十字病院へ行かせていただきました。

現地へは空路・陸路で移動しましたが、途中励ましの言葉をたくさん頂きとても勇気付けられました。石巻赤十字病院には全国各地から救護班が集結しており、それぞれが組織的に医療活動を行っていました。

我々は到着翌日に“湊小学校避難所”で救護活動を行いました。想像以上の地震・津波の傷跡を目の当たりにし言葉を失いましたが、被災者の皆さんが結束し前向きに避難生活を送られ、大変な苦勞の中でも私たちに感謝してくださる、その姿に感動と日本人のすごさを感じました。その日は5時間ほどで約70人の患者さん(ほとんどが風邪か薬切れの方)を診察し、1時間程度の休みのあと夜間救急外来を深夜まで担当しました。複数の医療支援チームで協働しましたが、皆が疲

れている中でも互いに尊敬しあい、地域の為に医療活動を行えたことは、これからの財産になっていくことと思います。翌日も避難所での救護活動を行い、夕方に現地を後にしました。被災者の方々や共に働いた他の医療スタッフのみならず、私が不在の間で協力頂いた山田赤十字病院の方々にも感謝申し上げます。



不安と緊張の中での救護活動

救急外来 看護師長 青木恵津子

3月11日の大震災を知ったのは、深夜明けの睡眠から目覚めて見たテレビからでした。どのチャンネルも押し寄せる津波の映像ばかりでした。阪神大震災の映像と重なりこの時点で震災の大きさを予感しました。

石巻に第4班救護班として出発したのは、発災後3週間目の3月28日でした。福島原発事故のため中部国際空港から空路で秋田に入り、陸路で宮城県石巻市に向かいました。秋田に降り立ったときは雪で、石巻まで無事に到達できるのか不安になりました。救護内容は4日間の日程でした。1日目は早朝6時に病院を出発し、秋田に移動。秋田から陸路で岩手を経て石巻市に夕方19時に到着。途中の高速道路のサービスエリア毎でガソリンの給油を行いました。

地震により物資の供給が滞っているのを感じました。病院到着挨拶後、情報収集を行い山の中の宿泊施設に移動し、就寝しました。2日目は朝5時起床で石巻日赤のミーティングに参加後、小学校での救護に向かった。約60名の患者の診察を行いました。16時に昼食と休憩をとり、17時から0時まで石巻日赤の救急外来で黄色・緑エリアを他の病院チームと担当し約90名の患者を診察しました。その後ホテルに戻り睡眠。3日目は大学の体育館で24時間体制の救護所で活動

しました。そして4日目に帰途につきました。2日間で3か所を移動しながらの救護活動は、初めてで体力的に厳しいものでした。しかし、救護班のメンバーは黙々と仕事をし、結束力は強かったことを覚えています。救護所活動は訓練で経験していましたが、病院支援は初めてで、他の病院スタッフとの協働で緊張しました。また、救護所で津波にのまれながら一命をとりとめた人の話や日和山からみた漁港の景色から津波の恐ろしさや何も残らない虚しさと生命の尊さを強く感じました。参加して一番思ったことは、メンバー全員が無事に救護から帰れたことです。



赤十字への信頼に応えるために

リハビリテーション科 中立大樹

平成23年3月11日、病院では直ちに災害対策本部が設置され、翌日には第1班が栃木県へ、3月14日より第2班が石巻赤十字病院へ派遣命令を受けました。私は第2班で、17日まで救護活動を行なってきました。当時、被災地は壊滅的状况で原発も不安定で、石巻市周辺の病院は機能しておらず、患者は石巻赤十字に集中している状態でした。

私は主事としての派遣で、その仕事は移動経路の確保、車の運転、資機材管理、情報収集と通信、医療活動の補助などで、いわば救護班の裏方です。被災地はライフライン、通信、情報など乏しいため、主事としての活動は忙しいものでした。また、救護活動も石巻赤十字病院内の黄色エリア（準緊急治療区域）での活動が主となり、朝晩なく忙しいものでした。

そんな中、被災者から「ありがとう」の声掛けや「頭を下げて拝まれる」といったことが多く、ガソリン不足の中、自ら車で私たちを先導してくれる被災者もいました。このとき、赤十字に対する信頼や責任を深く感じました。こういった経験が救護活動を乗り切った原動力になったと思います。また、無事救



車両に資機材を積み、職員に見送られ病院を出発。

護活動を行なってこられたのも、地域の皆様の赤十字に対する支援や、病院職員の丸となった支援があったからこそだと思います。本当にありがとうございました。これからも地域、また赤十字の力になれるように頑張っていきたいと思います。



全国の赤十字が結集し活動を展開する



班長（医師）を中心にミーティングを行う

日本赤十字社の国内救護活動体制

日本赤十字社の救護活動は、被災地支部が主体となって実施します。被災地に隣接する支部は大規模災害等の場合は、被災地支部からの要請がなくても災害の状況により独自の判断で救護班を派遣することができます。

全国には約480個の常備救護班が設けられており、班長となる医師1名、看護師長1名、看護師2名、主事2名の計6名で構成されています。災害による被害が拡大し、救護班が必要な場合は、救護班が支部長からの指揮命令により活動します。

山田赤十字病院にも常時8個の救護班が編成されており、訓練等を行い、災害時に備えています。



第3班 渡波小学校に開設した救護所

Ⅱ. 石巻赤十字病院支援要員派遣

派遣要員	派遣期間
石巻赤十字病院支援要員 看護師 (ER) 1名 事務 2名	4月 3日～4月10日
石巻赤十字病院支援要員 看護師 (ER) 1名	4月 8日～4月15日
石巻赤十字病院支援要員 看護師 (ER) 1名	4月13日～4月20日
石巻赤十字病院支援要員 看護師 (ER) 1名 薬剤師 1名	4月18日～4月25日
石巻赤十字病院支援要員 看護師 (病棟) 1名 薬剤師 1名	4月23日～4月30日
石巻赤十字病院支援要員 看護師 (ER) 1名	4月28日～5月 5日
石巻赤十字病院支援要員 助産師 (病棟) 1名	5月 3日～5月10日
石巻赤十字病院支援要員 薬剤師 1名 事務 1名	5月 8日～5月15日
石巻赤十字病院支援要員 看護師 (ER) 1名	5月13日～5月25日
石巻赤十字病院支援要員 看護師 (ER) 1名	5月23日～6月 4日

●薬剤師

石巻赤十字病院での薬剤部を支援するため、内服、注射調剤等の業務に携わるとともに、移動薬局である「メロンパン」での活動を行いました。「メロンパン」では、被災地へ移動し、被災者の内服薬を調べその薬の調剤、被災者への宅配を行いました。



日本赤十字社の医療救護活動は赤十字の人道的な使命感に基づき、以下のような活動を行っています

- *一刻も早い処置が必要な被災者に対する災害現場における応急処置
- *救護所 (既存の建物または天幕・エアーテント等) を設置しての活動
- *避難所等での医療救護及び巡回診療による避難者への心的支援
- *大規模災害時の広域的な観点からの救護班の派遣、赤十字病院での傷病者の受け入れ等、赤十字のネットワークを活かした後方医療活動

●看護師・助産師

【救急外来支援】

石巻赤十字病院の救急外来で他の赤十字病院のスタッフとともに救急外来業務を支援しています。具体的には、患者の診察・処置や検査の介助等に携わりました。

【病棟支援】

石巻赤十字病院の病棟での業務を支援しています。具体的には、患者さんの食事介助、清拭などの主に日常生活援助に石巻赤十字病院のスタッフとともに携わりました。



●事務要員

救護班受付 (救護班の受付及び資料説明、宿泊管理、物品管理等)、アセスメント (各避難所におけるライフライン・衛生・疾病等の環境衛生シートの作成等)、データ処理 (救護班名簿の作成、患者状況報告、放射線量報告、エリアライン表作成等)、救急外来における1次救急受付等の業務を行いました。



薬剤部 谷口知慎

皆さんは御自分の飲んでいる薬を誰かに伝えることができますか？・・・。

震災による大津波は、海側に面する宮城県石巻市街地を襲いました。市の半分ほどは約2mもの海水が数日引かず、壊滅状態だったそうです。内陸に位置し津波の被害を逃れた石巻赤十字病院に、約9000人もの患者が押し寄せました。石巻赤十字病院の職員は、ずっと不休で動き続けていました。その薬剤師達のため、石巻赤十字病院に支援活動に参加してきました。

病院内での活動は、主に内服薬や注射薬の調剤でした。震災前に比べて処方箋が約4倍にもなっており業務を圧迫して

いました。病院外においては、被災者にお薬を直接届けるという“移動薬局”が主たる活動でした。避難所に直接赴き被災者にいろいろお話を聞きました。着の身着のまま難を逃れた被災者は、いつも飲んでいる薬やお薬手帳が津波で流されてしまい、自分の薬を特定するものがなく困っていました。避難所暮らしの被災者から、今までに内服していた薬の聞き取りを行い、その薬とお薬手帳を新しく作成し、被災者の元へ届けました。「ありがとう。新しいお薬手帳、大事にするわ!」。そのときの笑顔を今でも覚えています。



第10班 巡回診療



第4班 石巻赤十字病院へ向かう途中

日本赤十字社の国内救護活動の歴史

救護活動は赤十字の中核的な活動です。戦時においては、日清戦争、北清事変、日露戦争、第2次世界大戦など多くの戦時において傷病者等の救護にあたってきました。平時の救護においては、1888(明治21)年の福島県磐梯山噴火に始まり、1959(昭和34)年の伊勢湾台風、1985(昭和60)年御巣鷹山の日航機墜落事故、1986(昭和61)年の三原山大噴火、1991(平成3)年の雲仙普賢岳噴火、1993(平成5)年の北海道南西沖地震、1995(平成7)年の阪神淡路大震災、2000(平成12)年の有珠山噴火と三宅島噴火、2004(平成16)年の新潟県中越地震、2007(平成19)年の能登半島沖地震等、被害の大きな地震、火災、風水害等あらゆる天災地変に際してはもちろんのこと、感染症流行時の患者の救護、船舶の遭難、列車事故等の交通災害、ガス爆発などの産業災害などに対しても多様な救護活動を展開しています。

当院においても、1995(平成7)年の阪神淡路大震災をはじめ、近年のさまざまな災害時における救護活動に参加しています。

Ⅲ. こころのケア要員派遣

被災によって避難生活が長期化することにしたがって心身の不調を訴える人の増加が心配されており、日本赤十字社は「こころのケア」委員を派遣しています。

派遣要員	派遣期間
こころのケア要員 2名	4月18日～4月25日
こころのケア要員 2名	5月29日～6月 3日
こころのケア要員 1名	6月14日～6月19日

被災者の心に寄り添うことを大切に

神経科 臨床心理士 杉谷恵里

日赤こころのケア要員は、看護師とコメディカルで構成されており、全国の赤十字病院から集まってきた10人ほどのこころのケア要員が1つのチームを形成して活動していました。当院では、救護班に臨床心理士や看護師が同行する形をとる等、発災直後からこころのケアができる体制を作ってきました。

活動内容は、避難所を巡回し、被災者に声をかけて様子を聴かせていただきました。ご家族を亡くされて孤立してしまった方、混乱している方、小さいお子様を連れた方等の不安や心配されている事を聴かせていただく事で、落ち着きを取り戻されたり安心していただくことが出来ました。また、話を聴くだけではなく、医師の診察が必要であると判断された方には、現地の医療へと繋

げる活動も行いました。注意が必要な方には、継続的に関わることができるよう、心のケア要員のチーム間で情報交換をしていつも声をかけるように心がけていました。

被災地では、時間の経過につれ、医療チームが撤退していく様子に「見捨てられた」と感じる方も少なくないため、日赤こころのケア要員は他の医療チームに比べ、長期的な関わりを持つことで被災者の見捨てられ不安を拡大させないような役割もありました。

被災地の現状は想像を絶するもので、衝撃的な体験をされ被災者の心に大きな傷を与えました。私たちの活動は微力なものではありますが、体験を聴かせていただくことで被災者を支え、心に寄り添えたのではないかと思います。



こころのケア

被災者に寄り添い、話を親身になって傾聴することで安心感を与え、悩みや不安を少しでも軽減することを目的とする日赤の「こころのケア」。救護班に加わるなどしたこころのケア要員が被災者のストレスと心の疲労を癒してもらおうとていねいなケア活動をしています。被災者だけでなく、救護活動にあたる人たちもケアの対象になります。

IV. 介護チーム職員派遣

被災地の介護施設の多くは定員を超えた受け入れを行っており、こうした施設で働く介護職員の心身の疲労蓄積が問題となりました。このため全国の日赤の社会福祉施設から介護チームを被災地に向け派遣しました。現地で働く職員と交代して業務に当たるなどその負担軽減を図る活動を行っています。

派遣要員	派遣期間
介護チーム職員 調整員 1名	6月18日～6月26日
介護チーム職員 介護職員 1名	6月25日～7月 1日



まずは利用者さんとのコミュニケーションから…

音楽で癒しのひとときを ～まごころ広場うすざわでミニソロコンサートを開催!

虹の苑 支援相談員 協海道友美

日本赤十字社第二次介護チームとして日本全国の日本赤十字社関連施設等から職員35人(介護担当職員:26人/1人7日間・連絡調整員:9人/1人9日間)が岩手県上閉伊郡大槌町へ平成23年5月31日～7月1日の間、派遣されました。

介護担当職員は、特別養護老人ホームらふたあヒルズ・介護老人保健施設ケアプラザおおつちにて1日あたり各施設2人ずつが施設利用者に対する日勤帯の介護業務を支援しました。

連絡調整員は施設支援職員の送迎や活動記録として写真等の撮影のほか、活動状況報告書のまとめや関係機関との調整、マスコミなどの取材活動の対応を行いました。また、日中は遠野市社会福祉協議会の被災地支援ボランティアネットワーク「遠野まごころネット」が運営する「まごころ広場うすざわ」で、赤十字ボランティアと協働しホットタオル・クールタオルの提供をしながら傾聴・リラクゼーションなどの活動を実施し、その活動の一環でユーフォニアムのミニソロコンサートを行いました。

プロジェクトの活動場所である「まごころ広場うすざわ」は、避難所で生活する被災者が気軽に立ち寄り、お茶や軽食を食べながら集うことができるコミュニティスペースです。被災者でありながら率先してその運営を取り仕切るのは、遠野まごころネットの手紙文庫館長の臼澤良一さんです。

臼澤さんもトロンボーンを演奏されていて、この震災による津波で大切なトロンボーンを三本も流されてしまったということでしたが、このミニコンサートを楽しみにしていたと話して下さいました。「ここに来れば何かがある。そんな広場にしたい。」と語られ、私にも「ここにいる間は、ぜひ毎日演奏して下さい!」と言われ、22日～25日までの間、「ホットタオル・クールタオル」の提供とともに毎日ミニコンサートを開催することとなりました。

「川の流れるように」・「ムーン・リバー」といった耳なじみによる曲をBGMのつもりで演奏していると、「やわらかい音だね」、「私も楽器吹いていたので、懐かしいわ」、「生で聴けるんだもんねえ」と、わざわざ椅子を移動して近くで演奏を聴いて下さる方もありました。

活動最終日には地元の音楽集団である「和美東」さんのミニコンサートにゲスト出演もさせていただき、「見上げてごらん夜の星を」・「翼をください」・「今日の日はさようなら」の3曲を演奏しました。「今日の日はさようなら」では「和美東」さんが私の演奏にアレンジを加えて下さり、即興のコラボ演奏となりました。体を揺らしてリズムをとられる方、演奏に合わせて歌詞を口ずさむ方、中には涙を浮かべて聞いて下さる方がみえました。

震災前に日赤奉仕団の活動をされていた女性から、「自分も合唱をしていたの。メンバーの中には亡くなった方もいて、35年も続いたコーラスグループだったけど再開は難しいのかしらね。でも、みんなよく歌った歌だったので、懐かしかったわ。」というお話も聴かせていただきました。ミニコンサートが被災者の方々にとってホッとするひとときとなり、楽しかった時を思い出す時間となっていれば幸いです。

このような機会を通して、「自分」も「楽器」も無事で、演奏活動ができることにも感謝しなければと心から思いました。つたない演奏ではありましたが、何かしらお役に立てていれうれしく思います。



和美東のミニコンサート案内ポスター



楽譜が飛ばないように臼澤さんに押さえてもらいながらの演奏です。

